# 宮本先生との思い出

坂田　奈々絵

宮本先生に出会ったのは、二〇〇七年の春のことだった。友人たちと連れ立って出席した新学期のガイダンスで、学部長の先生が「新しい先生が来ました」と言った。上智大学神学部はなんとなく浮世離れした学部で、当時の私は国立大学を退官された先生が神学部にやってくる、ということ自体に馴染みがなかった。しかも光延先生編纂の『神学資料集』に載っていた難解な論文の著者である。いったいどういう人がやってくるのだろうか、私達の緊張を尻目にのんびりとした歩調でやってきたその先生は名乗った。

「どうも、宮本武蔵……いえ、宮本久雄です」

私達は少しだけ笑った。

しかしその時は、私がこの先生と関わることになるなど考えてもいなかった。

宮本先生のことを意識したのはキリスト教ラテン語の講義である。私はその時、カリキュラムの都合で哲学科のラテン語が十分な形で受講できていなかったため、一も二もなくその講義に登録した。講義初日、教室には哲学科の院生が何人かいて、ラテン語文法の補強ができれば程度に考えていた私は面食らった。そして始まったのはトマス・アクィナス『神学大全』の「恩寵論」に関する箇所の原典購読だった。シラバスをちゃんと読んでこなかったことを若干後悔した。

さて、恩師としての宮本先生との思い出を回顧することは、私にはまだ抵抗がある。というのも、これからも宮本先生のことは師として仰いでいきたいし、まだまだ道を踏み出してもいない有り様だからだ。そこで、自分が先生から何を得てきたのかを考えることで、今後どのようなものを求めていくのかを書いていきたい。

第一に、色々な切掛を頂いた。学部三年生だった私が先生に魅力を感じたのは、まずこの点だった。当時の私は、自分の興味の方向性すら整っていない状況だった。講義によって若干ながらも神学の基礎が見えてきたような気がす

る頃だったが、その上で追究していきたいテーマをどのように乗せていくか、あるいは「研究」なんてものを自分がやってもいいのだろうかと消極的な迷いが常にあった。そんな時に宮本先生は「研究テーマはなんですか?」と声をかけてくれた。この時、自分は自分の内にあるこの漠然とした興味を「研究テーマ」として表現していいものなのだ、と安堵に似た感情を抱いた。あの時の自分の興味関心など、きっと今よりもずっと稚拙なものに聞こえたことだろう。しかし先生は、研究室で時間をとって、真剣に私の話を聞いてくれた。文章で表現するとなんのこともない体験だが、会話の内容だけでなく、緊張で目の前の机がぐらぐらと揺れているように見えたことや先生の口調まで色々なことを覚えている。これが先生から頂いた私の決定的な第一歩である。そしてこの時、この先生についていこうと思った。

宮本先生の特徴として「あなたにはまだ早い」「あなたには向いていない」という言葉を使うことがない、という点が挙げられる。学問的な理由があって「段階を踏むべき」という事は仰るが、どのような機会にあっても、積極的にぶつかっていくことを薦めてくれる方である。まだ学部三年生の自分を「東方キリスト教学会に来て、発表を聞いてみたらいい」と誘ってくださった。加えて、人の失敗にも寛大である。ラテン語の初級文法も覚束無かった時分の文法解析も注意深く聞いてくださったことも印象的な思い出である。

時には挑戦すべき課題が私の頭上を遥か高く超えていることもあった。本の装丁がそれである。フォトショップがわずかながら使える程度の私にとって、装丁を任されるという体験は降って湧いたような大イベントだった。先生から「装丁に使ったらどうだろう」と言われて渡された『大書源』を抱え、どうしたものかと途方に暮れたことを覚えている。その結果できたのが『大学の智と共育』(教友社、二〇一一年)だ。教友社の阿部川さんのご寛恕とお力添えのもとに出来上がった実際の装丁の出来はともあれ、本自体は「大学教育」をテーマとした様々な分野の専門家による論文集である。これを皮切りに、共生学の教科書シリーズや、それをもとにして他の先生からも装丁の依頼をいただく等、いくつかの貴重な機会をいただくことができた。素人の学生が装丁をする、ということはいささか奇妙なことに聞こえるかもしれないし、人によっては否定的に捉えるかもしれない。しかし私にとっては視野を広げ、技術を

身につけるまたとない経験だった。

第二に、知の柔軟な可能性を示してくれた。私にとって、宮本先生との六年間の関わりの中で中心となっていた一つの要素は「共生学研究会」だった。この会では学部四年生から博士の今まで、広報や事務連絡係を務めてきた。この会はラテン語名でSapientia Convivendiと称し、「共に生きる（相生きる）」ことについて、様々な分野から考察する研究会である。初めは二ヶ月に一回、次第に年に二回のシンポジウムとなっていったが、こうした集いの中で、美術史や現代の建築家、心理学者、そしてもちろん神学・哲学を専門とする先生方の貴重な話を聞くことができた。このような多様な人々の中心に据えられていたのが、常に「共生」である。つまりどのような学問でも、それは一人きりで一つの対象に没入することだけでなく、大きな一つのテーマについて他者と語りうる可能性を持つものであり、それもまた重要なのだということに気づかせてくれたのだ。いわば、各テーマが示す「人と人との共生」のみならず、多彩な学問同士の共生関係が示される場であったと言えよう。またその個々の話を一つの視座の基に統合的に語りうる先生の広い視野には、驚くべきものを感じている。

第三に、色々な冒険を共にした。ロシア旅行や南仏―スペイン旅行については他の方が書いていてくれるに違いない。私が体験した中で特に面白かったのは、数年前のパリでの顛末である。この年はオーストリアとチェコにゼミ旅行に行く予定だったのだが、それ以前に何人かがパリに先に入り、あるいは滞在していた。そして先生がストラスブールに用事があるとのことだったので、ストラスブールに一泊の小旅行をしよう、ということになった。私はちょうど、その小旅行の後にドイツに抜けて、ボイロン修道院に滞在し、その後ウィーンで皆と合流する予定を立てていた。さて、この小旅行が終わり、パリに戻る先生と固く握手をかわしつつストラスブール駅で別れた後、私は電車の乗り継ぎに失敗してしまい、パリ東駅に戻ってくることとなった。この時、私は途方に暮れていた。というのも、ドイツに滞在する気満々で、フランスにはなにも残していなかったからだ。それでひとまず駅内のカフェで食事をしていると、先生の声が聞こえた。「あなた、ここでなにをしているの？」。こんなに驚いたことはない。初めは気のせ

いかと思った。先生は数時間前にパリに到着した筈だし、その後、まだ駅の中にいるとは思ってもいなかったのだ。文字にすると、海外旅行初心者の失敗の後に偶然に恵まれただけの話だが、私の中の「宮本先生像」がなんとなく現れている出来事だと思った。飄々としていて、どこにでも現れて、失敗を腐すようなこともなくじっくりと話を聞いてくれるのだ。

このような物理的な「冒険」について書くことで、紙面を尽くすことも可能だと思う。しかし同時に、先生が知的な冒険者でもあるという点についても触れておきたい。上智では先生のもとに幅広いテーマをもった学生が集まった。もともと先生お一人で、神学部での思想史、新約・旧約聖書思想、ラテン語文献購読、そして教父学と、概説的な幅広い科目をカバーしているためか、それを受けて集まる学生も、ハヤトロギア・エヒイェロギアからトマス・アクィナス、教父、現代思想と多彩だったのだ。私も卒業論文として指導をお願いしたテーマは、サンドニのシュジェールという教父でもスコラ哲学でもない人についてだった。先生にとっては困惑されたことだと思う。しかし先生は私の報告を聞くだけでなく、資料を原典から一緒に丁寧に読み、そこにどのような思想的構造があるのか、熱心に語り合い、考えてくれた。見つけた資料を一緒に読んでいく行程は、実際に行った旅にも負けないくらいの大冒険であったと思う。先生の読み解き方は、常にどこか遠い世界へと駆けていくような、そんな自由さと軽やかさがあった。実にこのような懇切丁寧な指導を、学生皆に行ったのだ。先生の冒険の行程は、私の想像を超えるほどに濃密だったことなのだろう。その一端は上智大学のセミナーハウス等で活発に行われた合宿で、あるいは日々のゼミで垣間見られた。

第四に、味覚の楽しさを教えてくれた。日本酒の違いやチーズの種類、ワインのバリエーション等、先生に会うまではかけらも知らないことだった。おかげで一〇キロの脂肪もいただいたが、今度とも、積極的に求めていきたい所存である。冗談ではなく、この先生の「宴が好き」という性質が、大きな実りを得る場を用意してくれた。そこで交わされる会話はもとより、そのような場を通して様々な人と知り合うこともできた。また「食べる」ということについての根本的な考察も色々と頂いた。それは奇しくも「（イエスの）食卓」と、いま、私達がそこで営む「食」がどの

ような関係をなすのか、出会いとはどのようなものなのかを学ぶ場所であったと思う。これは先生の「教師」としての側面なのか、あるいは「司祭」としての側面なのだろうか。神学部という場所において、先生はこの二つの側面をいかんなく発揮されていたのではないかと、私は思っている。

私の人生を通して、先生との出会いは大変大きいものである。これだけたくさんの学びをいただき、共に泣き、笑い、食卓を囲んだ先生は他にはいない。私にとって、学科科目を教える「先生」や論文指導を行う「教官」と表現するにも足りない。まさに「師」と呼ぶにふさわしい存在である。

先生のますますのご活躍を心の底から祈りつつ。